

献上鷹・下賜鷹の特質と將軍權威

岡崎寛徳

はじめに

近世武家社会、將軍（幕府）と大名（藩）の關係においては、軍事的な面や政治的な面などによる支配・從屬關係が形成・維持されていた。同時に儀礼的な行為も、支配關係を明示する手段として有効に機能しており、近世社会を体系的に維持する上で不可欠な行為であった。¹ 實際、近世の將軍と大名の間には様々な儀礼的行為が存在していた。そうした儀礼的行為には贈与行為がともなうことも多くみられる。² 近世社会では、様々な人たちが、様々な場で、様々なモノの贈答を行っていた。

あるモノの贈答行為を当事者間の關係でみると、下位者から上位者への献上、上位者から下位者への下賜、ならびに同位者間での贈答に大別できよう。近世の將軍と大名を扱う本稿においては、上位者は將軍、下位者は大名、同位者間は大名間に相当する。その將軍と大名の間では様々なモノが贈答の対象となっており、刀劍・鷹・馬・食品・衣類・金銭など数限りない。その他、物的なモノではないが、官位や官職、將軍諱名の一字といった地位や名譽をあらわすものなどがある。また、贈答行為は単にそのモノを授受することだけではなく、書状や使者による御

礼・挨拶といった派生行為も存在する。

こうした將軍・大名間の贈答行為の中には、同じモノが献上・下賜両方に使用される場合がある。その一例が鷹である。これまで、鷹の贈答儀礼については、鷹の献上や「御鷹之鳥」の下賜・御振舞いを事例としての分析が行われ、鷹が近世社会の秩序―御鷹の權威による將軍を頂点とした支配秩序―形成・維持に機能していたことが明らかにされてきた。³ 筆者も前稿において、鷹の献上と下賜は連動した不可分の關係にあることなどを述べた。⁴

鷹は權威・権力の象徴とされる。これは、鷹そのものの性質（空を飛ぶこと、小動物を捕獲する能力があること、人が飼い馴らせば自由に扱えることなどがあげられる）だけではなく、為政者が鷹をほぼ独占し、他者へは許可なく鷹狩をすることを禁止したことなどが理由であろう。

では、どのような鷹が献上品・下賜品に適していたのであろうか。同じ鷹の贈答ではあるが、献上と下賜で、鷹そのものは同一の性質を有していたのであろうか。献上時の献上者と被献上者、下賜時の下賜者と被下賜者（拝領者）それぞれが求めた、鷹の特質や鷹への期待が導き出せば、なぜ鷹が贈答に扱われたのかという点がより鮮明になるのではな

いかと思われる。また、儀礼と一言で言っても、それは多種多様であり、一つの儀礼が完了するまでの過程には、さらに細かな行為が存在し、それらによって一儀礼が成り立っている。本稿では、鷹贈答の過程と鷹そのものの特徴から、献上鷹・下賜鷹の特質を検討し、鷹贈答における將軍權威介在の意義を一考することとしたい。

一 津軽家の鷹献上

鷹は産地が限定されている特産的な性格をもつもので、鷹の特産地を所領に持つ大名は、一定の時期に一定数の鷹を將軍へ献上するという時献上を行っていた。その鷹献上大名も決まっており、松前藩と奥羽諸藩が大半を占めていた。本節では弘前藩津軽家を事例として鷹献上を検討していくが、この津軽家も鷹の時献上を行う大名の一人で、毎年五居を献上することが恒例となっていた。

では、津軽家による鷹献上の事例を、安永期を中心として述べていくこととしたい。この時期を選択した特別な理由はないが、鷹の献上が恒例行事として行われている時期であり、史料から鷹献上に関わる様々な情報を導き出せるためである。史料は『津軽家文書』の「弘前藩庁日記（御国日記・江戸日記）」を使用する。⁽¹⁾ その中の安永五年（一七七六）日記から、鷹献上に関する記事を抽出したのが「表1」である。

安永五年日記の中で、鷹献上に関係する最初の記事は、七月二十八日に幕府鷹匠組頭原田甚六から、津軽家が鷹の所望を受けたというものである（後掲「史料3」）。八月に入ると、献上鷹だけではなく、鷹の餌

〔表1〕安永5年の津軽家鷹献上の過程

月 日	事 項
7. 28	幕府鷹匠組頭原田甚六から鷹の所望を受ける
8. 14	献上鷹用の餌鶏は「例年之通」
8. 27	鷹の「容」姿は「宜」しき状態
9. 3	献上・進呈鷹の決定 諸用道具決定
9. 4	8日の献上鷹出立と7日の藩主「見分」を伺う
9. 5	諸入用準備
9. 6	諸入用準備
9. 7	藩主「御見分」
9. 8	江戸へ出立
9. 29	江戸に到着 鷹を湯洗し家老が「御見分」する 献上後の関係者への礼品は「例年之通」
10. 5	原田甚六が来て鷹を「御覧」になり料理を振る舞う
10. 13	献上
10. 14	献上に対する奉書を頂戴する
10. 15	川越藩主松平千太郎と原田甚六に残りの鷹を進呈
10. 20	鷹匠、津軽へ出立

注：「弘前藩庁日記（御国日記・江戸日記）」より作成。
9月29日の記事から江戸日記による。

となる鶏や諸道具など、献上に関係する諸事が準備された。そして、藩主津軽信寧の「御見分」を経た後、九月八日、献上鷹を連れた津軽家の鷹匠が江戸へ向けて出立した。江戸に到着してからは、献上当日に備えての準備が行われた。献上が無事済み、残りの鷹を川越藩主松平千太郎と原田甚六に進呈し、十月二十日、鷹匠が津軽への帰国の途についている。

この経緯の中からいくつかの史料を掲げ、献上過程の特質を探る。

〔史料1〕は「御国日記」安永五年九月三日条である。¹⁾

〔史料1〕

一、御鷹匠小頭申立候、御献上之御鷹来ル八日立被 仰付度奉伺候、

裏真名板洩

藤代組三世寺村

一、一番若黄鷹

次五兵衛

表真名板洩

藤崎組岩井村

一、二番若黄鷹

茂左衛門

藻川古川添

広田組藻川村

一、三番若黄鷹

喜作

若柳

広田組姥范村

一、四番若黄鷹

源次郎

瀧井袋千ヶ沼

柏木組瀧井村

一、五番若黄鷹

九惣

右五居御献上

藻川与左衛門沼

広田組藻川村

一、六番若黄鷹

源助

右一居御用意

表真名板洩

藤崎組岩井村

一、七番若黄鷹

茂左衛門

但、御進物右御鷹昨日撃差上申候二付、先日奉伺候通、

尾打申候御鷹与引替、御留置奉伺候、

右七居当御献上并御進物御用意、在々御鷹待之者共撃差上申候處、

御鷹容宜御座候間、御留置被 仰付度奉伺候、

津軽家の鷹献上数は、この年も例年通りの五居である。「御献上」の鷹には「一番」から「五番」までの番号が順番に付けられ、「六番」の「御用意」と「七番」の「御進物」とは明確に分けられている。この「一番」・「二番」といった番号は、その年に捕縛した鷹の順番である。「一番」は「初種」とも呼ばれ、初鰹献上や初鶴献上などと同様に、鷹も初物が献上品に適していると意識されていた。一つ書きの右横に記されている「裏真名板洩」や「藻川古川添」・「若柳」などは、その鷹の出身地を示している。また、次五兵衛以下は、鷹を捕縛した「鷹待」と呼ばれる在地の者たちである。

注目したいのは、献上鷹の全てが「若黄鷹」＝若鷹であるという点である。若鷹は、その年生まれの一歳鷹で、成長すると大鷹と呼ばれる。大鷹に成長する前の若鷹が献上されたわけである。そして、「御鷹容」が「宜」しき状態であることも、献上鷹が選ばれる重要な理由になっている。尾羽が揃い、羽や爪に痛みや損じのないものが、「宜」しき状態である。献上鷹それぞれに「上」、「中ノ上」、「中」というようなランク付けがされる場合もあった²⁾。その場合、「下」ランクの鷹は献上されない。献上品として不適格なためである。

すなわち、献上鷹の条件・特質として、その「容」が「宜」しく、痛みや損じがなく、初物の若鷹であるという点をあげることができる。献上鷹には、視覚的価値や将来性が求められたのである。将来性とは、献上後に将軍が使用するという前提をもって鷹が献上されたということである。

若鷹を献上したのは津軽家に限ってのことではない。安永二年の「大名武鑑」から作成した「表2」によれば、鷹の時献上を行っていた大名は九家で、しかも、その献上鷹の全てが若鷹もしくは巢鷹であった。信濃国松本・高島両藩が献上する巢鷹とは、字のごとく巢の中にいる状態の雛であり、これから若鷹、そして大鷹へと成長していく。当然、鷹狩には未使用ということになる。鶴は鷹の種類のひとつで、網懸鷹とは網にかけて捕まえた若鷹のことである。どの大名も、これから將軍が使用するという前提で、若鷹や巢鷹を献上していたのであり、將軍もそうした鷹の献上を望んでいたと思われる。なお、「表2」では、津軽・松前両家の献上鷹は「御鷹」と記されているが、「弘前藩庁日記」から若鷹と確定できる。

【表2】安永2年の鷹献上大名

献上大名	居城	献上鷹
伊達陸奥守重村	仙台	黄鷹
佐竹右京大夫義敦	秋田	若黄鷹
上杉弾正大弼治憲	米沢	黄鷹
南部大膳大夫利雄	盛岡	若黄鷹
松平丹波守光和	松本	巢鷹・網懸鷹
戸沢孝次郎正産	新庄	黄鷹
津軽出羽守信寧	弘前	御鷹
諏訪安芸守忠厚	高島	巢鶴
松前志摩守幸広	松前	御鷹

注：「安永二年武鑑」より作成。

さて、將軍へ献上する鷹が決定し、諸事の準備が進められる中、津軽出立直前に藩主自らの献上鷹「御見分」が行われている。

【史料2】

一、於北之御縁、当御献上御鷹并御進物御鷹御用意御鷹共、御見分御座候間、拙者共大目付兩人罷出候、こうした「御見分」は、鷹

が江戸に到着した後も行われている。藩主が在国している場合は、藩主が国元、家老が江戸で、それぞれ「御見分」を行い、藩主が江戸にいる場合は、家老が国元、藩主が江戸で「御見分」を行っている。これは、將軍への献上品として相応しいかどうか確認をする意味があり、鷹所有者・献上責任者の許可をもって献上が可能となるということを示している。

【表3】安永元年～天明元年の津軽藩の鷹進呈先

年次	進呈先	石高（幕府役職）
安永元	板倉佐渡守勝清	安中3万（老中）
2	有馬中務大輔頼僮	久留米20万
3	井伊掃部頭直幸	彦根30万
4	水野壱岐守忠見	北条1.5万（御鷹掛若年寄）
5	有馬中務大輔頼僮	久留米20万
6	阿部備中守正倫	福山10万（奏者番）
7	松平千太郎直恒	川越15万
8	原田甚六正勝	（鷹匠組頭）
9	大納言家基	（將軍嗣子）
天明元	なし	
	松平右京大夫輝高	高崎7.2万（老中）
	有馬中務大輔頼僮	久留米20万
	立花左近将監鑑通	柳川10.9万

注：「弘前藩庁日記」より作成。

「表3」は、安永期（安永十年は天明元年に改元）における津軽家の鷹進呈先を示したものである。將軍嗣子から幕臣・大名まで進呈先は様々である。以下、將軍へ鷹を贈呈する場合は「献上」、幕臣や大名へ鷹を贈呈する場合は「進呈」という語を使用し、贈答行為を別記する。これは史料上、その行為が「献」と「進」に使い分けられる場合が多くみられることによる。

安永五年の場合、津軽家は川越十五万石の藩主松平千太郎直恒と幕府鷹匠組頭原田甚六

正勝に鷹を進呈している。

〔史料3〕¹²⁾

一、御鷹匠組頭原田甚六様方若黄鷹一居御所望二付被進候間、当秋御献上御鷹御登せ之節、右御鷹一居別段差登せ候様被 仰付候間、於其表可被 仰付候、委細之儀者御書役方其表御書役江可申参候、

〔史料4〕¹³⁾

一、松平千太郎様并原田甚六様江御献上之御残御鷹一居宛被遣候、尤被遣方之儀御書役二而取斗之、

〔史料3〕によれば、原田甚六から「若黄鷹一居」の「御所望」があり、それに対して津軽家は秋の鷹献上とともに鷹を進呈することを約束している。そして、〔史料4〕のように、鷹の江戸到着後、松平千太郎・原田甚六両名に「御献上之御残御鷹一居宛」を無事に進呈している。¹³⁾幕臣や大名から津軽家への鷹「御所望」は頻繁にあり、津軽家はそれら各方面に鷹を進呈していた。これは津軽家に限らず、松前や奥羽諸大名をはじめとする鷹供給諸藩も同様であつたと思われる。¹⁵⁾

こうして、幕臣や大名は、将軍からの下賜によるものだけではなく、鷹供給諸藩への「御所望」などによつて鷹を入手していた。〔史料5〕は、安永八年三月時に彦根藩井伊家がどのような鷹を所持していたのかを示す史料である。

〔史料5〕

一、仙北雁捉大鷹¹⁶⁾
一、北郡雁捉大鷹^同

松村善介

一、秋田大鷹

一、黒岩鴨捉大鷹¹⁷⁾

一、南部戸鑛山大鷹

一、雄勝郡大鷹

一、巢ヶ谷鶴

一、津軽大鷹

一、戸沢雁捉大鷹

一、奥州鮎川湊大鷹

一、七戸尾駁黄鷹

一、三埴鶴

右鷹共埴中餌飼申付候、

件之趣可申渡候、

三月

用人 中

鈴木平兵衛殿

これによると、井伊家は「拝領」とある仙北産(佐竹領)・北郡産(南部領)・黒岩産(南部領)の鷹とともに、秋田産(佐竹領)や雄勝郡産(伊達領)などの鷹を所持していることがわかる。「拝領」と記されているのは将軍から拝領した鷹であり、記されていないのは将軍からの拝領によるものではない。¹⁷⁾ その拝領ではない鷹の一居に、「津軽大鷹」がある。〔表3〕のように、藩主井伊直幸は御鷹掛若年寄水野耆岐守忠見とともに、安永二年に津軽家から鷹の進呈を受けている。この「津軽大鷹」は、井伊家が津軽家に所望して、安永二年に入手した若鷹であつた。

さて、津軽家は鷹を江戸へ登らせるに際して、献上と進呈を同時に行っていた。〔史料1〕では、「一番」から「五番」までが献上鷹であり、「六番」の「御用意」と「七番」の「御進物」が進呈鷹である。安永五年は松平千太郎と原田甚六が鷹の進呈先だが、「御進物」が松平千太郎に、「御用意」が原田甚六に渡されたとみられる。そして、「御献上之御残鷹一居宛」とあるように、あくまで進呈は献上の「御残」物であり、「御残」の進呈より献上の方が優先的に行われていた。毎年五居と定められていた献上鷹は一居たりとも欠くことはできず、五居が揃った上で、「御残鷹」の進呈が行われたのである。その年の最初に捕まえた「一番」から「五番」の鷹を献上していることや、「御残」という表現がそれを示している。

馬場弘臣氏によれば、小田原藩が幕閣に配った鮎も「献上御残」と表現され、それは幕閣の構成員であることに對する特権、また確認の手段として機能していたとされる。^⑧津軽家の「御残」鷹の場合は、必ずしも幕閣相手ではなく、先方からの「御所望」に對応して進呈している。ただ、馬場氏が中心に扱った家綱期には、津軽鷹も大老酒井忠清に度々進呈しているようで、この点は、今後時期的な変化・特徴を明らかにしていきたい。

また、「御残」や「御進物」・「御用意」の鷹は、進呈用だけではなく、献上の補填用としても利用された。安永六年時の〔史料6〕はその関連史料である。

〔史料6〕

一、御書役申出候、御献上御鷹目論之内、四番メ御鷹若柳不宜候付、

御進物之内六番メ御鷹表真名板測与認替被 仰付候旨申出達之、献上鷹の江戸到着後に「御見分」を行ったところ、五居の内、若柳座の「四番」鷹が「不宜」という状態であったため、献上鷹と同時に江戸へ登らせていた「御進物」の「六番」鷹と交換している。視覚的に十分な鷹のみが献上されたのであり、不適格な鷹は献上されなかった。津軽家はそうした不慮の事態に備えて、献上用五居に一、二居を加えた鷹を江戸へ送っているのである。そして、当初の予定通り五居を献上した上で、「御残」の進呈が可能となったのである。

次に、〔表2〕の中から、安永六年における將軍徳川家治の嗣子家基への進呈事例を示す。

〔史料7〕

一、大納言様御内々被 仰出候由、
陸奥守様 此方様 御内々ニ而片鳥屋之御鷹御座候者被献候様、
柴田甚六殿方被仰 越候、拾三枚尾羽之御鷹被献候儀、如何可有御座候哉、御内々御伺之處、弥被献候様被仰越、其段申上候所、右拾三枚尾羽之御鷹早々為登候様、御国元江申遣候様被仰出候、右ニ付、委細之儀者御書役方其許御書役江可申参候、此旨夫々被仰付、右御鷹被差登様可被 仰付候、

追啓

本文申遂候御鷹、表向者戸田久次郎殿御所望之分ニ而有之由御座候、此段共申遂候、

安永期、大納言家基は、將軍の嗣子として江戸周辺の鷹場で自ら鷹狩を行っている。これは『徳川実紀』などから確認できる。その家基から、

「御内々」の意図をもって伊達「陸奥守」重村と「此方」津軽信寧に鷹進呈（「被献候」とあるので献上に分類すべきかもしれない）の依頼があった。これに対して、津軽家は家基希望の「片鳥屋之御鷹」を早々に江戸へ登らせることとした。「片鳥屋之御鷹」は一歳の鷹で、やはり家基もこれから使用することが可能な鷹を要望し、津軽家もその期待に応えた鷹を渡している。

そして、これは家基が所有する鷹として進呈されるわけだが、「表向」は幕府鷹匠頭戸田久次郎勝愛が「御所望」していた。將軍嗣子も、大名や幕臣同様に、独自の働きかけによって鷹を入手していたのである。ただ、家基の場合、大名・幕臣と異なり、あくまでこれを「御内々」のこととして進めている。この当時、家基は将来の將軍職を約束されている立場にあったが、毎年一定数の鷹献上を受けないため、將軍からの下賜以外は、必要に応じ、鷹匠頭への進呈を「表向」として鷹を確保していたのである。その後、家基は將軍職につくことなく、安永八年に死去している。

二 井伊家の鷹拝領

本節では、諸大名からの献上によって將軍のもとに集められた鷹の中で、どのような鷹が諸大名へ下賜されたのかということについて、彦根藩井伊家を事例として検討していく。前節で明らかにした献上鷹の贈答条件と比較して、下賜鷹（拝領鷹）にはどのような特質がみられるだろうか。

『井伊家伝来古文書』に、井伊家がどのような鷹を將軍から拝領したかということを示す史料がある。それは、鷹拝領と同時に幕府役人から渡された、狩猟実績目録のようなもので、その鷹が何を何羽捕獲したかという詳細な実績が記されている。次の史料はその一例である。なお、前掲〔史料5〕の「拝領」とある鷹のように国元で管理・使用しているので、目録のみではなく鷹そのものも実際に拝領していることを付記しておく。

〔史料8〕⁽²⁾（括弧内＝筆者注記）

（包紙）

天明二壬寅年十一月五日

御拝領之御鷹相渡り候節加納遠江守様ニ而戸田五介様御渡被成候、

御書付 二通

（書付1）

戸田五介組

戊十月四日

献上 津軽越中守

四埒 雁捉

同心

一、藻川

横山権八

手代り同心

藤倉大八

真雁 一羽

白雁 一羽

真鴨 五羽

黒鴨 二羽

(中略)

合物数四拾六羽

内山七兵衛組

子十月十五日

献上 松平陸奥守

諸癖 鴨捉

同心

一、葛岡

萩原十蔵

手代り同心

原田平五郎

真鴨 九羽

黒鴨 三羽

(中略)

合物数拾九羽

戸田五介組御鷹匠組頭

岩間翁助

右之通御座候、以上

十一月五日

戸田五介

(書付2)

戸田五介預御鷹

一、雁捉 藻川

同心 横山権八

内山七兵衛預御鷹

一、鴨捉 葛岡

同心 萩原十蔵

井伊家がどのような鷹を将軍から拝領したかということが一瞥できる。この目録は、天明二年(一七八二)十一月五日、御鷹掛若年寄加納遠江守久堅の指示のもと、鷹匠頭戸田五介勝愛から井伊家に渡されたものである。津軽家の献上鷹が江戸に到着した後、「例年之通」に係者への礼品を進呈していることは、「表1」の九月二十九日条などにみられることだが、その関係者とは御鷹掛若年寄一名と鷹匠頭二名をさす。献上時においても、下賜時においても、将軍と大名の間の鷹贈答には、御鷹掛若年寄と鷹匠頭が幕府側の担当責任者として対応していたのである。

さて、「史料8」をみると、井伊家は天明二年、二居の鷹を拝領していることがわかる。一居は「藻川」、一居は「葛岡」と記されている。まず、「藻川」という鷹についてであるが、「献上 津軽越中守」とあるように、弘前藩主津軽越中守信寧が将軍へ献上した鷹で、その献上日は成年Ⅱ安永七年(一七七八)十月四日である。津軽家が献上した鷹は領内の藻川を出所地とするものであり、このように出所地名を鷹の名として付けていることは、将軍や大名にとって一般的なことであった。例えば、出雲松江藩の松平不昧(治郷)が所有していた鷹は、『放鷹』によると「真那板淵」や「黒岩」などのように、全てその鷹の出所地名をもつて認識されている²²⁾。

献上された「藻川」は戸田五介に預けられ、戸田組の同心横山権八と手代り同心藤倉大八が担当預りになった。そして、この鷹は「四癖」Ⅱ四歳(「癖」は鷹の誕生後、鷹部屋で過ごした年数を示す)になるまで鷹狩に使用され、「真雁 一羽」以下、四十六羽の諸鳥を捕獲したので

ある。中略した部分には、他の獲物の名と数が記されている。

ただし、この獲物名・数が記されている順序は、実際に捕獲した順序を示したのではない。当時、諸鳥には歴然とした格付があった。すなわち、鶴を筆頭として、次に雁、次に鴨という序列があり、これら三種はいずれも大型の鳥で、その他の鳥とは明確に分けられていた。

そして、「藻川」の場合は、捕獲した諸鳥の中では雁が最も格の高い鳥であることから、「雁捉」という格付となった。雁や鴨をいくら多く捕獲してあるいは全く捕獲しなくても、鶴を一羽でも捕獲した場合は「鶴捉」という格付になり、鶴や雁の捕獲経験がなくとも鴨を捕獲した経験があれば「鴨捉」という鷹の格付が付けられた。このように、(a) 鶴↓(b) 雁↓(c) 鴨↓(d) その他、という諸鳥の序列は、それらを捕獲した鷹に対する格付にも密接に関連し、(a)「鶴捉」↓(b)「雁捉」↓(c)「鴨捉」↓(d)格付なし、という序列も同時に存在していたのである。

では、井伊家が「藻川」と同時に拝領した「葛岡」という鷹についても確認しておこう。「葛岡」は、仙台藩主松平(伊達)陸奥守重村が將軍に献上した鷹で、献上日は子年Ⅱ安永九年の十月十五日であった。伊達領内葛岡産のこの鷹は、献上後、幕府鷹匠頭内山七兵衛永清の預るところとなり、内山組の同心萩原十蔵と手代り同心原田平五郎が担当した。そして、井伊家への下賜が決定されるまでの間(「諸時」Ⅱ「歳」、鷹狩に使用され、真鴨や黒鴨をはじめとして十九羽の諸鳥を捕獲した。先の「藻川」は雁も鴨も両方捕獲したことがあるため、格上の雁を冠にして「雁捉」という格付が付けられたが、この「葛岡」の場合は鴨の捕獲経験

があるものの、雁は捕獲したことがないため、「鴨捉」という格付にとどまっている。

また、「藻川」・「葛岡」はいずれも若鷹ではないことに注意したい。前節では、若鷹が献上鷹の条件にあることをあげた。これに対して、大鷹に成長し、將軍や將軍名代の鷹匠らが鷹狩を行い、捕獲した鳥の種類によって「雁捉」・「鴨捉」といった格付がされたものが下賜鷹となったのである。

〔表4〕井伊家拝領鷹の出所地と格付

拝領日	献上大名	出所地	預鷹匠頭	獲物数	格付
明和 7.10	南部大膳大夫	尾駱	内山七兵衛	11	雁捉
安永 7.10	南部大膳大夫	北郡	戸田久次郎	12	鴨捉
安永 9.11. 5	南部大膳大夫	北郡	内山七兵衛	84	鴨捉
天明 2.11. 5	南部大膳大夫	黒岩	戸田久次郎	27	雁捉
天明 4.10.22	佐竹右京大夫	岩崎	戸田久次郎	29	鴨捉
寛政 6.10	津輕越中守	藻川	内山七兵衛	26	雁捉
嘉永 4.5.15	松平陸奥守	葛岡	戸田五介	46	鴨捉
	松前陸奥守	岡崎	内山七兵衛	19	雁捉
	南部慶次郎	田崎	内山七兵衛	30	鴨捉
	佐竹次郎	志岩	戸田五介	7	雁捉
	松平陸奥守	西山	内山七兵衛	7	鴨捉
		本取	戸田久助	7	雁捉
		名		15	雁捉

注：『井伊家伝来古文書』1738-1、1946-1、2009-3、2152-1、2178-2、2413-1、24868-1より作成。

のである。

〔史料8〕のように、天明二年に井伊家が將軍から下賜された鷹は、津輕家と伊達家が將軍に献上したもので、鷹狩に使用され、「雁捉」・「鴨捉」の格付をもつ大鷹であった。こうした天明二年の例が特殊なものであるか、恒例のものであるか、確認しておく必要があるだろう。

〔表4〕は、〔史料8〕に類似する七

点の史料から作成したものである。これによれば、明和七年（一七七〇）から嘉永四年（一八五二）までと、疎らではあるが、井伊家が拝領した鷹には一貫性があることがわかる。天明四年を除くと、全て二居を拝領している。もともとその鷹を將軍へ献上した大名は南部・佐竹・津軽・伊達・松前の諸家で、鷹の時献上を行っていた大名である。この表の中で、特に〈格付〉の欄に注目すると、拝領した鷹は「雁捉」と「鴨捉」に限定されており、先述の（a）「鶴捉」や（d）格付なしという鷹は拝領していない。つまり、將軍が井伊家に鷹を下賜する際には、「雁捉」や「鴨捉」であることが条件にあり、その条件を満たした鷹のみが下賜されたのである。〔表4〕では七例であるが、〔史料5〕にみられるように、安永八年に井伊家が所持していた「拝領」鷹も「雁捉」と「鴨捉」である。いつ頃このような形態が確立したかについては不明であるが、恒例のものとして行われていたと考えてよいだろう。

当時の將軍家重や家治は、吉宗の回数には及ばないものの、毎年のように鷹狩を行っている。また、「玄鶴日記」⁽²³⁾によれば、延享二年（一七四五）から文政十年（一八二七）までの間、將軍家重・家治・家斉三代は、例年のように「鶴御成」を行い、様々な産地からの献上鷹で鶴を捕獲していることがわかる。すなわち、將軍は自ら鷹狩を行い、多数の「鶴捉」鷹を所有していたのである。

しかし、井伊家に下賜された鷹は「雁捉」と「鴨捉」に限定されており、「鶴捉」は一切下賜されていない。これは井伊家の家格によるものと考えられる。井伊家と同様に、参勤交代の帰国時に恒例として鷹を下賜されている御三家・加賀前田家・溜詰大名などが、「鶴捉」・「雁捉」・「鴨

捉」を下賜されているかどうかという点が重要である。

そこで、安永二年（一七七三）の「大名武鑑」⁽²⁴⁾をみると、鷹を下賜されている大名と、その大名が献上している鳥の種類が判明する。それをまとめた〔表5〕によれば、鷹を下賜されている大名は、御三家の尾張・紀伊徳川家、越前松平家、加賀前田家、溜詰大名四家、帝鑑間詰姫路・酒井家という九家である。

〔表5〕安永2年の鷹拝領大名

拝領大名	居城	詰間	献上鳥
尾張中納言宗睦 紀伊中納言重倫 松平讃岐守頼真 松平越前守重富 松平肥後守容清 前田中将治修 井伊掃部頭直幸 松平隠岐守定静 酒井雅楽頭忠以	名古屋 山松井津沢根山 路	大廊下 大廊下間 大廊下間 大廊下間 大廊下間 大廊下間 大廊下間 大廊下間 大廊下間 帝鑑間	雁鶴 帰国御礼二種一荷雁鶴 塩雁鴨 在国之節拝領御鷹捉飼雁鴨 水漬雁、在国之時計寒中鴨 御鷹鴨 在国之時計拝領御鷹ニテ捉飼之雁鴨 在城之節冬春之間拝領之御鷹ニ捉飼之雁

注：「安永二年武鑑」より作成。

まず、井伊家自身について

みると、鷹拝領後、「在国之時計拝領御鷹ニテ捉飼之雁鴨」を將軍に献上していた。

將軍から「雁捉」と「鴨捉」を拝領し、その鷹で鷹狩を行って獲た「御鷹之雁」と「御鷹之鴨」を献上したのである。鷹拝領とそれに伴う「御鷹之鳥」献上は連動した行為であり、例年行われていた。⁽²⁵⁾

次に、雁とともに鶴を献上している御三家についてであるが、鶴を献上しているのは尾張・紀伊家のみで、他家との差異がみられる。しかし、井伊家にみられるような「拝

領御鷹ニテ捉飼」という文言はみられない。ただ、「帰国御礼」とあるように、鷹を下賜されての帰国直後に鷹狩を行い、捕獲した雁と鶴を献上していたことが推定できる。

【史料9】は、紀伊家が「鶴捉」を拝領していたことを示す傍証史料である。⁽²⁶⁾

【史料9】

一、御帰国御暇之節、御拝領之御鷹勢州へ被遣、為御捉被遊候鶴

公儀へ御献上に相成候に付、先年より御領分并他領とも鶴飼付

取計来候に付、津領之内時所に寄、炮術試打等被致候儀、御鷹

場御差支相成候様との事、

伊勢国は、紀伊徳川家の拝領鷹場であった。⁽²⁷⁾ 紀伊家は帰国後、その鷹場で「御拝領之御鷹」による鷹狩を行い、「為御捉被遊候鶴」を将軍へ献上しているのである。この鷹場は、「公儀へ御献上」する鶴の「飼付」などを目的とした場であった。そして、井伊家が「雁捉」・「鴨捉」拝領に伴い「拝領御鷹ニテ捉飼之雁鴨」を献上していたこととあわせて考えると、紀伊家が拝領した鷹は「鶴捉」であったことが確定できるだろう。史料的には不明だが、尾張家も同様であると考えられる。

越前松平家と加賀前田家は、御三家と同じく大廊下詰で、ともに鷹を下賜されているが、御三家と異なり鶴を献上していない。両家は「雁捉」や「鴨捉」を拝領したと思われる。

また、井伊家と同じ溜詰大名である諸家も、やはり「拝領御鷹」で「捉飼」をした「御鷹之雁」や「御鷹之鴨」を献上している。拝領した鷹が「雁捉」・「鴨捉」という格付を有する鷹であったと考えられる。

そして、帝鑑間詰大名の姫路酒井家も鷹を拝領している。鷹拝領に伴う鳥献上をしていたかはわからないが、恐らく何かの鳥は献上していたであろう。酒井家は徳川譜代の中でも有数の家柄であり、先代が溜詰に列席した経験がある。先祖の功績・格式によって、帝鑑間詰であっても鷹を拝領できたと考えられる。近世後期になると溜詰大名は増加するが、溜詰となった大名は鷹を拝領するようになる。大名にとって鷹拝領の契機は溜詰列席であり、鷹と大名家格との密接な繋がりを見出すことができる。

以上のように、将軍から鷹を拝領した大名は限定されており、拝領した側の大名はその鷹で鷹狩を行い、「御鷹之鳥」を献上する義務を担っていた。大名の家格によって「鶴捉」・「雁捉」・「鴨捉」という格付の異なる鷹が下賜され、それに対応して大名は鶴・雁・鴨を献上したのである。

おわりに

近世武家社会で行われていた鷹贈答の中で、大名から将軍への贈答行為である献上においては、そこに求められた献上鷹の条件として、鷹の「容」が「宜」しく、初物の若鷹であるということが重要であった。視覚的に「容」が「宜」しい状態でない鷹は「宜」しいものと交換され、大名によって定められていた献上数が整えられた。そして、若鷹は献上後に将軍が使用するという前提をもって献上されたのであり、そうした将来性が重視されていたのである。献上直前には、その責任者である藩

主や家老らによる「御見分」が行われている。

津軽鷹は松前鷹などと並び名声が高く、幕臣や諸大名から「御所望」があった。それに対して津軽家は各方面に鷹を進呈している。進呈先はその年によって異なっているが、進呈より献上の方が優先的に行われ、大名間の関係以上に將軍との関係は優先・強力であった。

そして、將軍のもとへ献上などで集められた鷹は、井伊家などの諸大名へ下賜された。しかし、献上されたものがすぐそのまま下賜されたのではない。將軍もしくは將軍名代としての幕府鷹匠らが鷹狩で使用したものが下賜された。その鷹は、捕獲した鳥によって「鶴捉」・「雁捉」・「鴨捉」という格付が与えられた。井伊家の場合は、これらのうち「雁捉」と「鴨捉」のみが下賜されている。「鶴捉」や鶴・雁・鴨の捕獲経験のない鷹は下賜されておらず、これは井伊家の家格との関係で説明できるものと考えられる。さらに、下賜鷹は若鷹ではなく成長した大鷹であり、狩猟実績をもつ実践的な鷹であった。これらの点が下賜鷹の条件として意識されていたのである。

鷹の献上・下賜の中心は將軍であり、この贈答行為で最も重要なことは、未使用の鷹が献上され、將軍使用の鷹が大名へ下賜されたという点である。結果的には津軽家や伊達家などの領内を出所地とする鷹が井伊家などへ渡されるわけであるが、その間（中心）に將軍が介在していた。將軍の介在はただ単に贈答の中継点としてのものではなく、将来性のある未使用の鷹が献上され、それを將軍が使用したことによって鷹の「御鷹」としての価値が高まり、相応の格付をもった鷹の下賜を行うことができた。献上と下賜の間に、將軍（権威）が介在することによって、献

上品が下賜品になるのである。特に鷹の場合は、介在の性質として、所有とともに使用という面が加わることが特筆すべきものである。この將軍「所有＋使用」を中心に献上・下賜が行われているところに、権威の象徴である鷹の贈答品としての特質が見出せるのではないだろうか。この將軍「所有＋使用」ができる贈答品が鷹であった。⁽²⁸⁾
今後の課題として、鷹贈答の確立期・解体期の状況、鷹を媒介とした大名間交際の実像、拝領鷹の破損・死去時における大名の対応、鷹以外の贈答品との相違点の検討をあげておきたい。

注

(1) 儀礼研究は儀礼そのものの検討のみにとどまらず、当時の政治社会にどう関連・機能していたかという分析が進められている。渡辺浩「御威光」と象徴―徳川政治体制の側面―（『思想』第七四〇号、一九八六年。『東アジアの王権と思想』、東京大学出版会、一九九七年に所収）、小宮木代良「幕藩政治史における儀礼的行為の位置づけについて」（『歴史学研究』第七〇三号、一九九七年）など。

(2) 大友一雄「近世の献上儀礼にみる幕藩関係と村役―時献上・尾張藩蜂屋柿を事例に―」（『徳川林政史研究所研究紀要』第二三号、一九八九年）。

(3) 塚本学『生類をめぐる政治―元禄のフォークロア』（平凡社、一九八三年）、菊池勇夫「鷹儀礼にみる松前藩の位置」（『幕藩体制と蝦夷地』、雄山閣出版、一九八四年）、大友一雄「鷹をめぐる贈答儀礼の構造―將軍（徳川）権威の側面―」（『国史学』第一四八号、一

九九二年）、同「近世の御振舞いの構造と「御鷹之鳥」概念」（『史料館研究紀要』第二六号、一九九五年）、福田千鶴「「御鷹」をめぐる政治史」（『朝日百科・日本の歴史』別冊通巻一八号、朝日新聞社、一九九五年）、長谷川成一『近世国家と東北大名』序論・第一部第二章・第三章（吉川弘文館、一九九八年）など。

(4) 拙稿「近世武家社会における鷹贈答の構造―彦根藩井伊家を中心として―」（藤野保編『近世国家の成立・展開と近代』、雄山閣出版、一九九八年）。

(5) 近世初頭から寛文・延宝期における津軽家の鷹献上については、(3) 長谷川氏前掲著書が詳しい。

(6) 弘前市立弘前図書館所蔵『津軽家文書』「弘前藩庁日記」。

(7) 「弘前藩庁日記（御国日記）」安永五年九月三日条。

(8) 「鷹待」については、(3) 長谷川氏前掲著書第二章を参照。

(9) 「弘前藩庁日記（御国日記）」の享保元年八月二十八日条など。

(10) 「安永二年武鑑」（橋本博編『改訂増補 大武鑑』中巻、名著刊行会、一九六五年）。

(11) 「弘前藩庁日記（御国日記）」安永五年九月七日条。

(12) 「弘前藩庁日記（御国日記）」安永五年七月二十八日条。

(13) 「弘前藩庁日記（江戸日記）」安永五年十月十五日条。

(14) この原田は幕府の鷹匠組頭であるが、津軽家はそれとは別に五居の鷹を従来通り將軍に献上しているので、原田宛進呈鷹は將軍への献上を目的としたものではない。別の意図・用途をもって、原田は津軽家に鷹を「御所望」したのである。筆者は、將軍の「御鷹」を使う実際の鷹狩に備えて、鷹匠自身の技術訓練等を目的としたもので、「御

鷹」を傷つけることを避けるための処置ではないかと推察する。

一方、川越藩主松平千太郎の場合は、どのような目的で津軽家から鷹を入手していたと考えられるだろうか。筆者は藩領内で鷹狩を行うためではなかったかと推測する。『上福岡市史』資料編第二卷（一九九七年）によれば、「川越藩主がいつ頃御鷹御免の大名となったのかさだかではない」（同書四四八頁）が、幕末には鷹狩を行っていた。

また、鷹場が將軍からの認定によるものか藩独自の設定によるものかということも不明である。しかし、鷹は所有するだけではなく使用するところに価値があるので、川越藩主松平家の鷹狩は安永期にまで遡れる可能性があるのではないだろうか。川越藩を含めた藩領鷹場の存在・機能を明らかにしていく必要があるだろう。

(15) 所望がなくなると、積極的に鷹を進呈する事例もみられる。例えば、松前家は参勤交代時に領内を通過する南部家に対し、鷹を進呈することを恒例としていた。榎森進「北方世界の交流から見えるもの―松前氏と南部氏の交流を素材に―」（渡辺信夫編『東北の歴史 再発見』、河出書房新社、一九九七年）参照。

(16) 彦根城博物館所蔵『井伊家伝来古文書』八一三番。

(17) (4) に同じ。

(18) 馬場弘臣「近世前期の産物献上と献上御用―小田原藩の「鮎」献上をめぐる―」報告要旨（『関東近世史研究』第四〇号、一九九六年）。

(19) 「弘前藩庁日記（江戸日記）」安永六年十月二十九日条。

(20) 「弘前藩庁日記（御国日記）」安永六年九月二十八日条。

(21) 『井伊家伝来古文書』二二五二―一番。

(22) 宮内庁式部職編『放鷹』一三九頁（吉川弘文館、一九三一年、一九八三年復刊）。

なお、〔史料1〕・〔史料5〕・〔史料8〕を作成したのは、それぞれ津軽家側・井伊家側・将軍（幕府）側であるが、いずれも、鷹はその出所地が明記されている。出所地の明記は、どの大名がその鷹を献上したのかということを示すものでもある。さらに、津軽鷹・松前鷹といった特産価値を維持することにも関連していただろう。

しかし、鷹を実際に使用する将軍家鷹場の地方史料には「御鷹」という総称のみしか記されていない。これは、その史料の書き手に左右されることで、鷹の出所地を認識する必要性の有無があらわれていると思われる。鷹場地域の村人にとっては鷹の出所地は問題ではなく、将軍の所有物としての「御鷹」であるということが重要であった。

(23) 「玄鶴日記」〔放鷹〕九七～一〇九頁。

(24) (10)に同じ。

(25) (4)に同じ。

(26) 「勢州御鷹場之件旧記」『南紀徳川史』第十七冊九九七頁（南紀徳川史刊行会、一九三二年）。この史料の各所に鶴飼付・献上の記事が散見する。

(27) 紀伊家の伊勢国鷹場については、斉藤司「近世前期における五畿内近国の鷹場編成」（関東近世史研究会編『近世の地域編成と国家』、岩田書院、一九九七年）を参照。

(28) 元禄～正徳期については、拙稿「幕府生類憐れみと大名の鷹贈答―津軽家を事例として―」（『大倉山論集』第四三輯、一九九九年）。

（おかざき・ひろのり 中央大学大学院）